美しいものの代名詞　塩釜

「塩釜」は、好奇心旺盛な貴族達にとっては、あこがれの地として「美しいもの」の代名詞となっていきました。

そして「浜で美しい塩釜」は「葉まで美しいシオガマ(花)」というかけことば掛詞から数多くの「花の名」となっています。

たとえば、ヨツバシオガマ(中部地方)、ミヤマシオガマ(中部地方以北)、コシオガマ(日本全土)など十四種類に及びます。

そして、めしべが葉に変化した国の天然記念物「鹽竈神社の鹽竈桜」も「葉まで(浜で)美しい」という意味が込められているのです。

鹽竈桜

コシオガマの花

源融の伝説

源融は、陽成天皇の譲位で皇位を巡る論争が起きた際、自分も皇胤の一人であると主張しましたが藤原基経に退けられたといいます。

融の死後、河原院は息子の昇が相続、さらに宇多上皇に献上されており、上皇の滞在中に融の亡霊が現れたという伝説などが「江談抄」「古事談」に見えます。この話が、脚色されて源氏物語の夕顔巻に使われています。

東北で最も長い歴史のまち塩釜

塩釜は西暦七二四年に国府多賀城が築かれた際、その港町「国府津」としてつくられたまちです。そのときから現代まで、港町・門前町として東北で最も長い歴史を積み重ねてきました。ですから源融の話も長い歴史の中の一コマにしかすぎません。

さあ、塩釜で千三百年の歴史を堪能し、そして京文化の源となったものを見つけてみませんか。

◆「塩竈」と「塩釜」の表記◆

漢字の「竈」は「かまど」を意味しますが、「釜」は「かまどの上にのせるかま」という意味です。「竈」という漢字が画数も多く難しいためか、次第に簡易な表記で音も似ている「釜」の字と混在して用いられてきました。

昭和十六年、塩竈市役所では「塩竈」に統一して使用していますが、JRや施設名などには「塩釜」が多く用いられています。市名は「塩竈」ですが、公文書などでも「塩竈」と「塩釜」の両方を使用することが認められています。

地名の由来について

「塩竈」は、もともと海水を煮て塩をつくる製塩用のかまど(竈)を指す名詞でした。以前は日本各地の砂浜にこのようなかまど(塩竈)があり、これが海辺の風景に趣を添えていたといわれています。塩釜も、竈のある場所として有名になり、そのまま地名になったといわれています。

また、塩竈は「国府津(こうづ(国府の港という意味))」とも呼ばれていました。しかし、塩竈神社が、陸奥国の総鎮守として建てられ、信仰を集めるようになり、国府津よりも「塩竈」が地名として定着していったといわれています。

参考資料

・花井滋春氏より平成十九年七月ヒアリング
（東北福祉大学　教授）

・菅原周二氏より平成十九年七月ヒアリング
（NPO法人みなとしほがま　副理事長）